



278号  
2022/11

日中文化交流市民サークル'わんりい'  
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方  
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp



**虎爺温泉**：台湾旅行社のツアー登山に参加しました。天気はあまり良くなかったのですが、予定の日程をこなして無事下山。そのあと温泉で打ち上げとなりました。日本とは違い、水着をつけるので気分は今一つ。水泳帽も被る規則だったのですが、登山で使った手拭いをほっかぶりして代用しました。南国的で良い温泉でした。

(台湾花蓮県・虎爺温泉 2012年11月 撮影：佐々木健之)

'わんりい' 2022年11月号の目次は18ページにあります

今月の四字成語は、日本語の四字成語辞典には取り上げられていないようです。他の幼児用「四字成語辞典」にも載っていませんでした。

・>・>・>・>・>・>

昔、魯の国に孟武伯もうぶほくという大臣がいました。彼は大風呂敷を広げるのが好きで、その中で約束したことなどは、すっかり忘れて、何時も反故にしてしまうのでした。

ある日、彼の親しい友人である子明しめいが、訪ねて来て彼に手伝いを頼みました。彼は二つ返事で引き受けましたが、その約束を忘れて、手伝いに行きませんでした。

暫くして、彼らの仲間の一人がみんなを宴会に招待してくれました。孟武伯も宴会に来ているのを見て、友人が笑いながら言いました。「何日か会わない間に、君はまた随分肥ったね」：その会話を聞いて、子明は孟武伯をジロリと見ながら言いました。「いつも自分の言葉を食べる（約束を守らない）人は、当然肥るに決まっているさ」

孟武伯はこれを聞くと、今まで自分が他人の話聞いて約束をしては、すぐ忘れてしまうことを思いだして、彼らが、自分のことを皮肉っているのだと気が付き、恥ずかしくなり顔を赤らめて、俯いてしまいました。

・>・>・>・>・>・>

**言葉の意味：**食言＝約束を守らないこと、自分本位に振舞うこと

**使い方：**彼はいつも食言而肥だ。他人の頼みにいい返事をするが、約束を守ったためしがない。

・>・>・>・>・>・>

この言葉、この本では上記のようになっています

すが、ネット上には少し違った話が出ていました。

その話では、宴会を催したのは魯の国の哀公あいこうで、哀公にはお気に入りの郭重かくじゆうという大臣がおりましたが、彼は大変肥っていました。孟武伯はこの郭重が哀公に寵愛されるのに嫉妬して、哀公の前で恥をかかせようと、郭重に対して「以前よりまた一段と肥りましたね」と声をかけました。それを聞くと、哀公が郭重を庇って、しかも孟武伯の日頃の行状を苦々しく思っていたので、敢えて口を挟みました。「肥る理由は人によって様々だ。中には、度々自分の言葉を飲み込んで（約束を守らずに）肥る人もいる」と言ったのです。そこで孟武伯は自分が皮肉られていると感じて恥じ入ったというお話で、「左氏伝」



挿絵：満柏画伯

にあるそうです。

さらに調べてみると、同じ「左氏伝」の言葉としながら、この本と同じお話も載っていました。3000年もの間、人々の間で生きてきたお話ですから、お話の筋が違っていても不思議はありませんね。

でもその意味は、変わることなく正確に伝わっています。「食言」とは「自分が言った言葉を食べてしまう」即ち「前言を翻す」、「約束を反故にする」ことで、端的に「嘘をつくこと」と解釈されるようになりました。嘘とか違約と言っても、自分の利益のためにつく嘘、自分の都合を重んじて、他人との約束を守らないといった、マイナスのイメージが非常に強い言葉です。

広辞苑にも「食言(しょくげん)＝嘘をつくこと」と載っていますが、これにまつわる四字成語には言及していません。日本語に置き換えるのが難しい「四字成語」なのですね。

# 『楚辞』の中の神話

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

中国はかつて神話なき国と言われていました。そう言われてみれば、中国にはギリシャ神話やインド神話、あるいは日本の『古事記』のように天地創造、人類創生から民族のいわれを物語る、まとまった形の神話は存在しません。これは高度な古代文明をもつ民族としては珍しいことのように思われます。しかし中国では過去に全く神話が存在しなかったかといえれば必ずしもそうとは言えません。

経書をはじめ諸子百家等、諸々の文献の中に神話の痕跡と思われる記載が数多く散見されます。今回は神話の痕跡を色濃く残しているとされる『楚辞』九歌・湘君の中からその一端を取りあげてみましょう。

chǔ cí jiǔ gē xiāng jūn jié lù  
『楚辞』 九歌・湘君 (节录)

qū yuán  
屈原

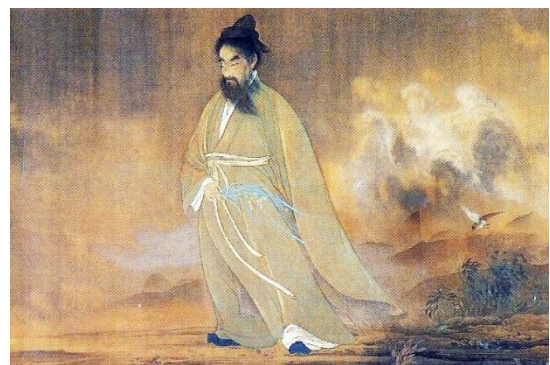
jūn bù xíng xī yí yóu  
君 不 行 兮 夷 犹  
jiǎn shuí liú xī zhōngzhōu  
蹇 谁 留 兮 中 洲  
měi yào miǎo xī yí xiū  
美 要 眇 兮 宜 修  
pèi wú chéng xī guì zhōu  
沛 吾 乘 兮 桂 舟  
lìng yuán xiāng xī wú bō  
令 沅 湘 兮 无 波  
shǐ jiāng shuǐ xī ān liú  
使 江 水 兮 安 流  
wàng fū jūn xī wèi lái  
望 夫 君 兮 未 来  
chuī cēn cī xī shuí sī  
吹 参 差 兮 谁 思

\* 屈原=(前 343? ~前 277?) 戦国時代、楚の貴族。詩人。楚の懐王の信任厚く、重用されたが、頃襄王の時、強国秦に対抗するために齊を援護する策が退けられ、更に讒言にあって追放され、各地を放浪した後、失意のうちに汨羅江で投身自殺した。

- \* 楚辞=中国古代の南方文学を代表する詩文集。屈原の作品が主要な部分を占める。屈原は楚辞の形式を借りて、自らの無念の思いを述べたとされる。
- \* 湘君=湘江の水神。この部分は招神の儀式の際唱えられる祝詞のりとのようなものであったか(諸説あり)。
- \* 行=進む。
- \* 兮=語気とリズムを整えるための語で、格別の意味はない。楚辞、楚歌の類に多用される。
- \* 夷犹=一か所に留まる。
- \* 蹇=ああ。感嘆詞。
- \* 美要眇=身なりの美しいさま。
- \* 宜修=身なりを整える。 \* 沛=氣勢の盛んなさま。
- \* 沅湘=沅江と湘江。
- \* 江水=川の水。一般に長江を指す。
- \* 参差=参差しんし。上下不揃いな様。ここでは樂器、簫しょうの類を指す。

[和訳]

留まりしまま、君は来ませず  
ああ、誰が為に中洲に御座す  
凛々しくも、身を繕つくろいて  
桂の舟にて我急ぎ行き  
沅湘に波無からしめ  
江水の流れ静めて  
待ち望めども君は来ませず  
誰をか思ふえうて簫吹き居ます



屈原 横山大観・画(厳島神社蔵)

## 李白の『憶秦娥』

報告: 花岡風子

今日のお題は『憶秦娥』という〈詞〉の作品でした。作者は李白と言われていますが、これに意を唱える説も多く、未だに論争に決着が付いていないようです。〈詞〉の最盛期は唐の末期から滅亡後、宋の時代ですが、李白は盛唐の詩人ですから、初めから違和感がありますね。「〈詞〉としては非常に完成度の高い作品ですね。こんな立派な作品を作れるのは李白しかいない、ということで李白にしておけ、ってことだったかも知れませんが、後世、誰かが李白の名を騙って偽作したとも思われますね。李白の時代は〈詞〉がここまで完成していなかったの、このジャンルに関する限り、さすがの李白にもここまでの技術はなかったと思われます」と植田先生。

〈詞〉とは唐代にはじまり、五代を経て宋(北宋)で全盛期を迎えた歌謡曲の歌詞みたいなものです。当時は琵琶や胡弓のメロディーに歌詞を付けて歌われていたのが、時代が下って、楽曲そのものは失われ、曲ごとに定められた作詞法(平仄と押韻)だけが残ったものです。

また『憶秦娥』は入声(詰まる音)で韻を踏むことで、悲哀を表現しています。悲哀に満ちた『憶秦娥』という作品の内容に踏み込む前に、作品を味わう上で欠かせない典故の効果について触れておきます。典故とは古い典籍や故事の中の言葉から湧き上がる特定のイメージのことです。例えば、表題の「秦娥」とは、「娥」は美しい女性を意味するので、秦家の美女、ということですが、それだけでなく「秦娥」という2文字にまつわる数々の物語からくる連想がこれに重なっているのです。秦娥、秦女、秦王女、これらはいずれも同じようなイメージを醸し出すキーワードになっています。

さて、イメージのもとになる物語の一つに、弄玉ろうぎょくという秦の穆公ぼくこうの娘の伝説があります。この娘は、簫しょうという楽器に夢中になり、なかなか結婚に興味を示さなかったところ、簫の名手である蕭史しょうしという男性に会い、結婚します。父の穆公は鳳台という建物に二人を住まわせました。この二人は来る日も来る日も鳳凰の鳴き声を真似て、簫の練習をし、やがて天に昇って仙人になってしまった、というのです(漢の『列仙

伝』という書物に記載があります)。この簫の響きには別れを暗示するもの寂しさが込められています。

また別のイメージを持つ伝説として以前もご紹介しました。言い寄ってくる小金持ちのセクハラ親父を気丈な態度で突っぱね、ソデにした美女、というお話もありましたね。これら複数のエピソードとイメージが入り混じって、「秦娥」という2文字を見ただけで、中国人は「気丈な美女」と「もの悲しい別れ」を連想するというわけなのです。

更にもう一つ付け加えておきますと、表題の『憶秦娥』は楽曲の名称であって、必ずしも作品の内容を表わすものではありません。しかしこの作品に限っては楽曲の表題が歌詞のイメージと一部重なって見えます。

さて前置きが長くなりましたが、雰囲気やムードを感じ取ったところで、内容を見ていきましょう。

## 『憶秦娥』李白

簫声咽しょうせいむせび

(簫の音が咽ぶように聞こえて来る)

秦娥の夢断しんごたる秦楼しんろうの月

(物悲しい簫の響きで秦娥は目を覚ます。彼女の住む楼閣に月がかかっている)

秦楼の月

(繰り返し)

年年柳色灞陵ねんねんりゅうしよくはりょうに別れを傷む

(毎年、柳が芽を吹く頃、人は灞陵の橋はりょうで別れを傷む。)

この灞陵という地名がまた柳と共に別れをイメージさせるキーワードになっています。灞陵とは漢の首都長安の東南にある灞陵橋のことで、ここから東方に向かう旅人に柳の枝を折って手向けるという風習があり、これにちなんで昔から「折楊柳」という言葉が別れの詩に多く読み込まれています。これは春の別れを暗示しています。

らくゆうげんじょう せいしゅうせつ

## 楽遊原上の清秋節

楽遊原は都の南方にある高台の名所で、ここに登ると長安から西方に向かう古い街道を見渡すことができます。これが咸陽の古道です。さらに西の方を見遣ると渭城の橋が見え、これが西方に向かう旅人を送る場所で、清秋節とは旧暦の九月九日重陽の節句を指しています。古くは重陽の節句に高台に登り、菊酒を飲みながら遠くの親戚知人を偲ぶという習慣があったようですね。

重陽の節句は秋の別れをイメージしています。

おんじん

## 咸陽の古道音塵絶つ

咸陽の古道で別れたあと、愛しい人からの便りも途絶えてしまった。咸陽古道とは長安から西方に向かう古い街道のことです。音塵とは音沙汰、消息のことです。

## 音塵絶つ

(繰り返し)

せいふうざんしょうかん か りょうけつ

## 西風残照漢家の陵闕

西風とは秋風のことです。残照とは夕焼けのことです。そして、漢家の陵闕とは、漢王朝歴代皇帝の陵墓を意味しています。

この作品全体から、次のようなバーチャル風景が浮かんでくるようです。秦娥の住む樓閣に月がかかっている。待ち焦がれる人は帰って来ない。時に甘い団欒の夢を見るのだけど、どこからか聞こえるもの悲し気な簫の音で夢が絶たれてしまった。毎年春の訪れと共に、灞陵橋の柳の緑が鮮やかだ。それを見るにつけても心が痛む。

季節はやがて秋になり、清秋節に楽遊原の高台に上って咸陽の古い街道を見渡すと、西の方にも渭城の別れの場所が眼に入るが、愛しい人からの便りも無い。

秋風の吹く頃、夕焼けが漢王朝の陵墓を虚しく照らしている。歌詞全体が悲哀と別れに満ちた内容です。「あっち行ったりこっち行ったり、どうなっているのやら？」と思うけれど、「別れ」というコードで繋がっています。日本の演歌で言うと、札幌で別れたと思ったら、長崎で又別れている、みたいなもんです。なるほど〈詞〉というのもそういうもんかいな、と。

理屈っぽく考えたらいけないんです。日本人が演歌を聴いて感じるムードみたいなもんですから。長年〈詞〉に接していると、逆に日本の演歌の良さがわかるようになった気がします。日本の演歌もまんざら捨てたもんじゃないなあ（笑）」と植田先生。

さて、〈詞〉はその昔は、楽曲に合わせて歌われていました。〈詞〉にも詩と同様、平仄があり、これは入声で韻が踏まれています。咽（エツ）、月（ゲツ）、別（ベツ）、節（セツ）、絶（ゼツ）、闕（ケツ）これは日本語で読んでも詰まる音ですね。これが悲哀のイメージを倍加させるのですね。〈詞〉思えば、人間ごく悲しいことが起きたとき、確かに「ウッ」と言葉になり切らない声を出してしまいますね。こうしてみると、つくづく漢詩は、意味と音が織りなす芸術だなあ、と思います。そして、男女や親子の悲しい別れは、いつの時代もどこの人にも欠くことのないテーマだけに、「憶秦娥」から伝わってくる雰囲気は時代と文化を超えて、共通で味わうことができますね。

さて〈詞〉のもとになる曲は一体どんな曲だったのでしょうか？なんと植田先生から明代の人が復元した『憶秦娥』の楽譜が追加資料として配られ、歌って聞かせただけだったのでした。7音階全部使った、西域の雰囲気を感じる美しいメロディーでした。〈詞〉の多くは日本の民謡や演歌と同様、五音階のペンタトニックで構成されていますが、中には7音階のものもあり、これはその一例でした。

この他、補足教材として『憶秦娥』の中に歌われた「楽遊原」という地名を詠んだ李商隱（晩唐の詩人）の『登楽遊原』という五言絶句も鑑賞しました。この講座では植田先生が、補足資料をご用意くださり、テーマの詩にまつわる色々なこととお話くださるので、学びが深まり、味わい深いのが特徴です。

皆様のご参加をお待ちしています。

yì qín é      lǐ bái  
忆秦娥      李白

xiāoshēngyān      qín é mèngduàn qín lóu yuè  
箫声咽      秦娥梦断秦楼月

qín lóu yuè      nián nián liǔ sè      bà líng shāng bié  
秦楼月      年年柳色      灞陵伤别

lè yóu yuánshàng qīng qiū jié  
乐游原上清秋节

xián yáng gǔ dào yīn chén jué  
咸阳古道音尘绝

yīn chén jué      xī fēng cán zhào      hàn jiā líng què  
音尘绝      西风残照      汉家陵阙

前回(10月号)の最後に広西省柳州の「螺螄粉」(タニシ・ビーフン麺)がインスタント食品となって、今では、海外でも人気があることを紹介した。もともと当地の郷土料理にすぎなかったこの麺が中国国内で広く知られるようになった切っ掛けは、2012年に中央テレビ局で放送されたドキュメンタリー番組『舌尖上的中国』(舌で味わう中国)で取り上げられたからと言う(2020年6月15日付『東方網』)。

同年4月16日に始まったこのドキュメンタリー作品は、中国各地の伝統的な食材と料理を、それを巡る人間模様と併せて取材し、デジタルハイビジョン映像で紹介している。中国の奥深い食文化を伝える番組として一大旋風を巻き起こし、国際的にも注目された。その成功に味を占め(?)その後、2014年に第2シリーズが、さらに、2018年に第3シリーズが制作された。私も、第1シリーズと第2シリーズはDVDと解説書を買って何回も味わっている(書籍は第1シリーズが光明日報出版社、第2シリーズが中国広播電視出版社)。インターネットでも無料公開されているので、未だの人には、ぜひ、視聴をお薦めしたい(実は、私も第3シリーズはまだ見ていない)。

この第1シリーズの第1回目は「自然的饋贈」というテーマで、四季折々食材を採る、拾う、掘る、捕まえる、といった営みを通じた自然と人との関わりを描いている。この回は5つのサブテーマに分かれているが、その2番目が「厨師愛笋、日其単純」(料理人は笋が大好き、それは素朴だから)と題され、ここに「螺螄粉」の主要な材料であるタケノコの漬物(酸笋)と「螺螄粉」自体が出て来る(開始後14分ごろ)。こうした映像を見ると、やはり、インスタント製品ではなく本物を当地で食べてみたくなる。

ところで、この第1シリーズ全7回(各回約50分)の中には、香港・マカオ・台湾を含む25省の94種類もの食材・料理が出て来るが、河南省は登場しない。河南人にとっては、さぞかし無念(不満?)だったのではなかろうか。河南省は、2014年の第2シリーズ(全8回)になって、ようやく登場する。

その第5回目「相遭」は人の移動とともに離れた

地域の異なる食材、製法が会うという「縁」がテーマであり、その中で、杭州の「小籠包」(ショーロンポー)と開封の「灌湯包」(「小籠灌湯包子」)の関係が取り上げられている(開始後16分ごろ)。

小籠包というと、日本では、上海・豫園の南翔饅頭店や台湾の「鼎泰豊」が有名である(いずれも日本に分店が、とくに後者は東京にも至る所に、ある)。開封の「灌湯包」は見た目は似ているが、スープの量が多い(写真は『舌尖上的中国』の一場面)。食べ方にもコツがあり、まず、皮を少し噛んで穴をあけ、スープをすすってから、その後に中身を食べることで、口一杯に独特の香ばしさが広がる。ただし、スープは熱いので、注意が必要。

「灌湯包」の歴史は古く、北宋時代(960～1127年)の開封(当時は「東京」、「汴京」とも)の社会生活を描写した孟元老著『東京夢華録』巻二に「王楼山洞梅花包子」の店というのが出て来る。これが、現在の「灌湯包」の原型だそうである(劉震主編『最開封』2013年、河南人民出版社)。因みに日本語訳(入矢義高・梅原郁、1996年平凡社・東洋文庫)のこの箇所には「包子は肉と野菜を小麦粉の皮で包んで蒸した饅頭。この梅花包子は、…汴京の名物に数えられていた。」として別の書物が引かれている。その後、長年に亘って製法にさまざまな改良が加えられ、現在に至る。杭州の「小籠包」はすでに宋代の開封における製法に学んでいるらしい。この縁は北宋に続く南宋(1127～1276年)の都が今の杭州に当たる臨安であったことによる。

現在、観光等で開封を訪れ本場の「灌湯包」を食べ



開封「灌湯包」(『舌尖上的中国』より)

よと思うと、代表的な老字号(老舗)レストランは「第一楼」である。私も何度か行ったことがある(直近は2017年12月20日)。この「第一楼」という名前は、梅花包子を当時の人が「在京第一」を褒め称えたというところから来ている(『最開封』より)。度重なる黄河の氾濫で、北宋当時の町は現在、地中深く埋もれているので、その店が残っているという訳ではないが、この「第一楼」は、開封市内に本店以外にいくつか分店がある。いずれも立派な構えの高級店であり、地元の人々は普段この「第一楼」は余り利用せず、別の「黄家老店」に行くそうだ。私も、地元の友人と何度か行った。こちらも十分知られた老舗であるが、やはり、店の雰囲気は庶民的で、値段も「第一楼」より安かった。

ただし、大河報社編『厚重河南』(第15集)2011年、河南大学出版社、によると、以前は、この「黄家老店」も「第一楼」と名乗っていたが、1990年代前半に、中国で商標登録制度が整えられたのにもなって、本家以外は「第一楼」の名称が使えなくなり、「黄家老店」と名称を変更したとのことである。

今回の2つ目は「雁鳴湖」での思い出である。「雁鳴湖」という名の湖は西安、長春など、中国に複数あるが、ここで紹介したいのは、開封市街と鄭州国際空港(鄭州市新鄭市)を結ぶ高速道路の途中、鄭州市中牟県にある湖である。2014年10月22日、友人に連れられてそこに「大閘蟹」を食べに行った。

この淡水系の蟹(河蟹)は日本では「上海蟹」という名で知られているが、『舌尖上的中国』の第1シリーズ・第7回の「我們的田野」でも「河蟹社会」のテーマで取り上げられている。また、『Baidu 百科』によると中国の三大閘蟹は、安徽省の花津湖大閘蟹、河北省の勝芳蟹、江蘇省の固城湖大閘蟹と言われているが、雁鳴湖の「大閘蟹」も地元の名産品として結構知られている。もっとも、今では、いずれの地でも天然ものはほとんど見られず、養殖だそうである。

「島上漁廳」(島のレストラン)という看板が掲げられていたが、屋外のテーブルに、メインの「大閘蟹」のほか、とれたての野菜・果物、その良さを活かした地元料理が豪華に並ぶ形である(写真参照、このほか最後に「麵」を食べた)。味は、どれも美味しかったが、とりわけ、「大閘蟹」のミソには感動した。高級料理の「上海蟹」を河南省の自然に囲まれて、たっぷ



雁鳴湖の「大閘蟹」ほか(2014年10月撮影)

り食べることができたのはこの上なく幸せな気分であった。なお、当時、この「雁鳴湖」周辺は、ほかにとくに何も印象なかったが、現在、中国では郊外に野外レジャー施設が整備されつつあるので、かなり様子が変化しているかもしれない。

今回はもう1つ、何の変哲もない1枚の写真を紹介したい。ご覧の通り、クロワッサンなどパンが3つ、ヨーグルト2カップ、ゆで卵とリンゴがレジ袋に無造作に入っている。この「雑感」で以前にも触れたように、2019年末の12月24日(火)から、私は河南省の開封と鄭州を訪れた。帰国予定の28日(土)は、成田行きの便が早いので空港近くの Marriott Bonvoy ホテルで前泊した。朝食付きプランを予約したが朝が5:15 出発と余りに早く、まだ開店前だった。間に合わないとフロントに言うと、特別に包んでくれたのがこの写真のセットである。些細なサービスのようだが滅多にないことなので、空港内のベンチに座って、まず写真に収めてから、有難くいただいた。もちろん、その時は、それが直近最後の河南省での「食」となり、その後3年余りが経とうとは全く思ってもみなかった。(続く)



河南省での朝食(2019年12月)

## 中国の面白い神話物語・伝奇物語（19）－古鏡記（2）－

顧傑

前は、「古鏡紀」について少しお話しましたが、今回もその続き、作者の物語をお伝えしたいと思います。

~~~~~

ここで少し、私自身が見聞した、鏡の不思議な出来事を話しておこう。

ある年の四月一日。正午ごろ、役所の応接間で横になり、微睡んでいると、こんな時間なのに日が暮れていくのを感じた。部下の役人が慌ただしく入って来て、日食がはじまったと報告した。服を整えて鏡を手を取ったが、その鏡も薄暗くくすんでいて、輝きが失われている気がした。この時始めて、鏡は天地陰陽を集めて輝いているのではないかと気が付いた。そうでなければ、太陽が薄暗くなったら鏡の光も消えてしまうということはあるまいだろう。

あれこれ考え込んでいるうちに、鏡がだんだん明るくなってきて、気が付くと、外には明るい日差しが戻って来ていた。日食が過ぎ、太陽の輝きが戻ると、鏡も元通りになった。それ以来、雲が空を覆い、太陽や月が輝いていないときは、鏡も輝きを失うことがはっきりした。

その年の八月十五日、友人が訪ねて来た。この友人は、長さ四尺、柄に龍と鳳凰が刻まれ、刃の左側は炎のような、右側は水の波紋のような模様が浮き出た銅剣を手に入れたと言った。

友人は、「私自身何回か経験したのですが、この剣は不思議な力が有ります。毎月十五日、天地が晴れたとき、この刀は、暗い部屋に置いても、一メートル以上先まで届くような強い光を発します。あなたが新しいものや不思議なものを好んでいることを知っているので、今日はそれをお見せしようと思います」と言う。

その日の天気は快晴。部屋を閉めて暗くし、友人と一緒にいった。鏡を取り出し、横に置いてみると、鏡が光り、まるで昼間のように部屋全体が明るくな



50年前に発掘された越王勾踐の剣(中国サイト美篇から)

った。青銅の剣を横に置いたが、光は全く見えなかった。友人はそれを見て驚いて、「鏡をしまってください」と言った。

鏡を器にしまうと、剣が光っているのは分かったが、光は1~2メートル先までしか届かなかった。友人は青銅の剣を撫でながら「宝物の力にも、強弱の差があるものなのだ！」とため息をついた。それから、満月になると、鏡を暗い部屋に持っていくと、鏡の光はいつも数メートル先まで輝いているが、月光が射し込んでくると、鏡の輝きは失われてしまうのだった。つまりこの鏡は、太陽や月の光に反射して輝くのではなく、太陽や月よりは弱いけれど、自ら光り輝くことが出来るものだったのだ。

その年の冬、私は国史を編纂する仕事に参加して、蘇綽<sup>そしやく</sup>という人の伝記を作成するよう命じられた。私には下僕がいたが、彼はもう70歳にもなっていた。彼はかつて蘇家に仕えていたこともあり、歴史的な話もよく知っていて、少しは文章も書けた。私が蘇綽の伝記を書いているのを見て、

「蘇綽様は私に親切にしてくださったので、今日、あなたさまが、あの方のことを書いておられるのを見て、私は懐かしくて思わず涙がこぼれました。蘇氏の鏡は、蘇氏の河南の友人である苗季子<sup>みやおじし</sup>から贈られたものです。蘇綽様はとても気に入っていました。蘇





三鏡(卍紋鏡・菊花亀背紋・八卦紋菱花紋) 遼寧省博物館蔵(中国サイト搜狐から)

是非拝見させて頂きたいものです」

兄弟は驚いて

「どうしてそんなことがわかるのですか？」と訊いた。僧侶は、

「私は呪文を多少習い、風水の読み方も知っています。こちら

蘇綽は死ぬ前に苗季子を呼んで、

『私はもうすぐ死ぬと分かっているが、私が死んだらこの鏡が誰の手に渡るかは分からない。今日は卦を立てるから、横で見えてくれ』と言い、自分で卦を立てた。卦を見ながら蘇綽は、

『私の死後十数年で我が家はこの鏡を失う。どこに行ってしまうのか分からないが、このような神聖なものは、必ず何らかの兆しが残るはず。今、汾河の近くに神聖な気配が上がっていて、卦にも見えるから、宝鏡はそこに行くのだろう』

苗季子は、『誰がこれを手に入れるのか分かりませんか？』と訊ねると、蘇綽様はもう一度卦をよく見て、『最初は侯という人の家に行くだろう…そして次に王という人が手に入れる。しかしそれ以降のことは、卦には現れていない』と仰いました」。

下僕は言い終わると、その時のことを思いだして、思わず涙をこぼした。

蘇家に問いただしたところ、本当にもともと宝鏡があり、下僕が言ったように蘇綽の死後に失われたとのことだった。そのため、私が書く蘇綽の伝記には、最後にこの出来事も書くことにした。

蘇綽の占いの能力は世界でも類を見ないものだと言われて久しいが、実際に卦を立てて占った様子は伝わっていなかったもので、この話は、彼の占いの実際を知るのに良い話だと思った。

時は移って、大業九年正月一日の朝、一人の僧が食べ物を乞いに来た。私の兄弟の一人は、彼を気立てが良い人物と判断し、家に招き入れ、夕食をもてなすだけでなく、長い間会話を楽しんだ。

雑談の間に、僧が兄弟に言った。

「お宅には至高の鏡が秘蔵されているようですね。

らのお宅の上には、青空に向かってまっすぐに伸びる青の気があります。この青の気は、月の呼吸とつながっていて、その至高の鏡が発しているものなのです。2年近く外から観察していましたが、その貴重な鏡を拝見したくて、今日のような吉日を選んでお願いに上がったのです」と言った。

兄弟はこれを聞くと、一層驚き、又自慢にも感じたので、鏡を取ってきて僧の前に置いた。僧は恭しくひざまずいて、鏡を手に取り、喜びの表情を浮かべて眺めまわしていた。しばらくすると、

「この鏡には、普段は表に出ない霊的な現象がたくさんあります。金色のクリームを塗り、真珠を砕いた粉でこすって手入れをすると良いでしょう。そうすると、太陽が当たった時に、壁に輝かしい光と影が現れますよ。」

更に僧侶は、ため息をつきながら、

「もし、この尊い鏡の光を五臓六腑に充てる方法があれば、強い心身を得るでしょう。その人は病気で死ぬことを恐れる必要がなくなるだろう…まず香で燻し、クリームと真珠粉を塗れば、泥の中に隠しても、光と影が見えなくなることはないでしょう」

僧侶の言うとおりにしていたら、本当にうまくいったのだが、僧侶は二度と現れなかった。

以上になります。

いかがでしょうか？

短い物語を三つ並べましたが、やはりその鏡は神物でしょうか。

今回は「鏡」自体についての物語だけでしたが、次回はまた、その鏡に関わる奇々怪々な妖怪や神鬼の話をしていしましょう。

それではまた。

## 「東西の峻厳な二人の革命家」(5)

和田 宏

党副主席兼国防部長の林彪らが、『毛主席語録』を作り、紅衛兵を煽った。当時大学3年生だった私も、「日中友好協会正統派(毛沢東派)」に所属して、日光戦場ヶ原で行われた日中友好青年キャンプに参加し、毛主席語録を振り回し、“東方紅”とか“大海航行靠舵手”、“下定决心 不怕牺牲 排出万难 去争取胜利”を高唱した。

『毛主席語録』の前書きには“读毛主席的书, 听毛主席的话, 照毛主席的指示办事, 做毛主席的好战士”と、林彪の序文が載っていたが、このキャンプで騎馬戦ごっこをした際、私は林彪気取りで作戦部長を自称し、味方の騎馬隊を指揮した(笑)。

林彪は、毛沢東の後釜に座ろうとしたが、毛沢東



「毛主席語録」を手にする筆者(1967年)

の妻・江青をはじめ張春橋、姚文元、王洪文の「四人組」がモルヒネ中毒で統合失調症の林彪は如何なものかと首を縦に振らなかった。焦った林彪は毛沢東を暗殺しようとしたが、娘の林立衡が周恩来に父親の謀反をチクった為、今度は林彪自身が危うくなり、滞在していた北戴河から近い山海関空軍基地から強行離陸しソ連への亡命を謀る。ところが、乗った人民解放軍の航空機が1971年9月13日、モンゴル人民共和国上空で墜落し、林彪本人、妻・葉群、息子・林立果ら9人が墜落死。墜落の原因は今なお不明である。



「林立衡」と「周恩来」(1966年) ウィキペディアより

ウィキペディアには、墜落原因として①燃料切れ②逃亡を阻止しようとした側近同士間の乱闘における発砲③ソ連が入国拒否の最終的意思表示として地对空ミサイルで撃墜した、という諸説が紹介されている。

また、逃亡の通報を受けた毛沢東は「天要下雨 娘要嫁人(雨は降るものだし、娘は嫁に行くものだ。好きにさせれば良い)」と言い、特に撃墜の指令は出さなかったといわれる。

近年、研究者の間では革命期における軍人・林彪の功績を客観的に再評価しようという機運も起きており、故郷の湖北省など少なくとも5カ所で観光客誘致などのための像が建てられている、という。

1972年9月29日、現職の内閣総理大臣として、北京を訪問した田中角栄と、国務院総理の周恩来が日本国政府と中華人民共和国政府の日中共同声明に署名したことにより、両国間の国交が成立し

た。“日本が迷惑をかけた・・・”と田中総理の演説に対して、周恩来は、“迷惑をかけた”などという軽微な被害ではない“と怒ったが、共同声明に署名したあと、角栄の右腕を千切らばかりに、激しく振って握手を交わした。

このあと、田中総理は中南海にある毛沢東の部屋を訪れ、長年の喫煙と筋萎縮性側索硬化症でヨボヨボになっていた当時 78 歳の毛沢東と面会した。毛沢東は、田中総理に向かって、『喧嘩は済みましたか？喧嘩をしなければ本当の仲良しにはなれませんよ！先の戦争は、日本の軍部が中国に戦争を仕掛けたもので、悪いのは日本軍部であり、中国の人民と日本の人民は共に被害者でした。』と話しかけたのである。2022年10月の今から見て、50年前の出来事であった。

### 『毛沢東は詩人』

毛沢東は、詩人でもあり、沢山の漢詩を作っている。そのうちの一つ、1961年2月に作った七言絶句を紹介しよう。曙の太陽が真新しい光で練兵場を照らしている。若い次の中国を担う世代には素晴らしい志を持つ者が数多く居る。華美な服装で飾るより、祖国を守る服装をしたいと、歌っている。

颯爽英姿五尺槍  
曙光初照演兵場  
中華儿女多奇志  
不愛紅裝愛武裝

毛沢東が亡くなって1ヶ月後、1976年10月6日、「四人組」が一斉に逮捕された。連行される江青に向かって、女中が唾を吐きかけた。江青は、死刑判決が言い渡され、仮釈放中の1991年5月14日に首吊り自殺した。“主席、你的学生和战友来见你了！（毛主席、あなたの生徒で戦友（の私）があなたに会いに行きます。）”と遺言めいた言葉が古新聞の片隅に書かれていた。

### <二人のエピソード>

オリヴァ・クロムウェルと毛沢東という東西の二人の峻厳な革命家について、私の偏向したエッセイを最後まで読んで戴き、感謝申し上げたい

(笑)。そこで終わりに二人のホッとするエピソードを紹介しよう。鬼のようなクロムウェルでも、よく笑い、よくしゃべり、よく冗談を飛ばしたという。シェイクスピアの喜劇『ウィンザーの陽気な女房たち』の中にも出て来る当時流行っていた民謡“グリーン・スリーブズ”が好きで、よく歌っていた。この歌は、ヘンリー8世がアン・ブーリンの為に作ったという説もある。

毛沢東は、「水滸伝」が好きで長征中も肌身離さなかった。また自分を太平天国の乱の指導者・洪秀全になぞらえて真似をしていたこともある。洪秀全はキリスト教的理想を掲げ、地上の天国を造り出そうと土地均分・男女平等・アヘン禁圧・偶像破壊などを訴え、民衆をひきつけて14年にわたり清朝と対峙した。彼は世直し運動の指導者として孫文や毛沢東に大きな影響を与えた。

1970年12月、毛沢東はアメリカのジャーナリスト、エドガー・スノーと会談した時、自分のことを「和尚打傘」と形容した。和尚は髪がなく（無髪）、傘を差す（打傘）と天が見えない（無天）、「髪」と「法」は4声と3声の違いはあるものの同音である。すなわち「無髪無天」は「無法無天」であり、法律も無視、天理（道徳）も無視する、つまり「無茶苦茶やりたい放題」という洒落言葉である。毛沢東は「自分はやりたい放題好き勝手をやってきた男さ」と、言ったつもりなのである。ところが、27歳の通訳・唐聞生が文字通り、毛沢東は“傘をさしてショボショボ歩く坊主の様な人生だった”と通訳したため、スノーら西側の人達は、偉大な指導者の毛沢東も心の中は寂しかったんだろうなあ、と勘違いした。

クロムウェルは、『国王と言えど、国家・国民にとって害になる以上、取り除かなければならない。』と言い、新中国の領袖・毛沢東は、『政権は銃口から生まれる』『道は自分で切り開くもの』と言った。

二人の革命家の激烈な言動は、その時代には理解されず、“反逆児”、“異端児”と見られるものなのである。シェイクスピアは言った、『この世は舞台、人はみな役者だ』と。 (完)

次に案内されたのは第三の石刻芸術室だった。巨大な動物の石像以外は、ほとんどがガラスケースに入れて陳列されていたので、写真は反射して駄目だろうと思いながらもとにかく撮っておいた。「あっ！これがあの有名な・・・」と後で感激するしか手がないかもと考へて。この辺りは殆ど駆け足で通り過ぎる程にしか時間がなかったからだ。

第三、第一室の特に心に残ったものを次に挙げる。

### (1) 乾陵の堂々たる虎や犀の石像

乾陵は唐の高宗と則天武後の合葬墓で、後に陪葬された章懐太子、懿徳太子、永泰公主（三人とも武后により自殺を強いられた）の壁画で最近特に注目されている。

西安の西北部には、この陵の他に漢の武帝のものなど多くの大規模な陵があるが、今回は参観の機会がなかった。墓道に並ぶ石像の、中でも特に獅子と五米もある有翼の馬、後世にその各々の首の部分破壊された石人像は素晴らしいと聞いている。次回には是非訪ねてみたい。

### (2) 昭陵の六駿

昭陵は唐の太宗(李世民)の墓で、周囲60km、167の陪塚を有する。その祭壇には、太宗が全国統一を成し遂げるまでの数々の戦いに乗っていた六頭の愛馬のレリーフがある。その内の二つは盗まれてアメリカに渡り、今ではフィラデルフィア大学の博物館にあるという。残りの四つがこの(西安)博物館に移されて陳列されている。しかし私はアメリカに持ち去られたもの(馬とその脚の流れ矢を抜き取っている部下の將軍の図)が一番好きだ。アテネのパンテオンのレリーフが大英博物館にあり、ギリシャの文化大臣が盛んにその返還を訴えているのを思い出させる。

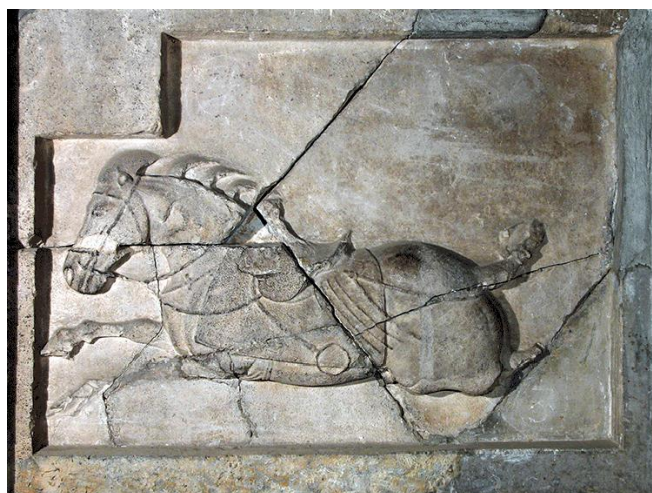
中国の人々にとってどれ程残念なことだろう。

### (3) 隋代の少女の石槨(ひつぎ)

中に誰がいたのかは忘れていたが、見覚えがあり名のある人のものとは知っていた。後で調べたところ隋の初代皇帝・文帝(楊堅)の孫で、僅か9歳で亡くなった「李静訓」の石槨ということだった。時代は聖徳太子が小野妹子を送り出した年の翌年で、隋から裴世清が妹子に伴われて入国した608年のこ



石犀（西安碑林博物館HPから）



昭陵六駿のうち白蹄馬（西安碑林博物館 HP から）

と。墓には多くの金銀の装飾品の他に、素晴らしい白磁の水差し、ローマから送られてきた銀貨、首飾り、ローマガラスなど当時の第一級の宝物が惜しげもなく副葬され、その棺の蓋には「これを開ける者は死す」と言う意味の四文字が刻まれていたという。

### (4) 漢代の画像石

高校時代の漢文のテキストでおなじみの画の石があった。当時はその内容は好きなのに、読み方が独りよがりでおぼろしいから(レ点と言うのが気に食わないのだ)嫌っていた。大学時代高齢の教授の発声が少々異常で、呼吸さえままならぬ位に見え、よく友人と「次の字を発音する前に逝っちゃうんじゃないの」と心配し合ったものだ。それらの石を見ていると漢文についての様々なことが思い出され、懐かしく、また突然に教授の顔が目に見え、吹き出しそうになった。

## (5) 周代の青銅器

そのいくつかは 1973 年に上野で見えていたからまたまた感激。まだ八か月の三男を背負い二人の手を引いて見に行ったのだが、係員に「絶対に子供を泣かせるな」と言われ、宣誓して入場したものだ。それが今では三人を国(?)に置いてそれらの出土された現地で対面できるなんて！

## (6) 「和同開珎」

これも上野で対面していた。その銀貨を見て「よくがんばっているな」と強く思った。古代からの日中交流の証として充分にその役割を果たしている。銀貨でさえこれ程やっているのだもの、私だってなにか・・・と随分気分が落ち込んでいた。ところが帰国後、長編の「武則天」と言う本でその持ち主の生涯の一部を知る機会があった。持ち主の<sup>ひん</sup>王・李<sup>り</sup>守<sup>しゅ</sup>礼は武后によって自殺させられた章懐太子（武後の次男）の子であった。父親の罪のために、幼児の頃から他の二人の兄弟と共に宮中の奥深くに幽閉され、毎年宦官による杖打の刑を受けていたという。その十年の間に他の兄弟は亡くなったが彼だけは生き延び玄宗の時代に 70 歳で亡くなっている。三人の兄弟が「自分たちは雨の降る日を当てられる」と語り合う場面が忘れられない。背中の傷が数日前から痛むためだ。この和同開珎は、遣唐使の礼物を玄宗が彼に与えたものとされているが玄宗も同じ場所で一緒に幽閉されていた経験があり、以後ずっと仲がよかったようだ。

しかし彼の性格は十年余りの幽閉と屈辱的な杖打によって歪められ、権力者にはへつらい、弱者にはやたらと虚勢を示し、道楽のための借財を常とし、そのくせ負債は返却しないという酷い人間になってしまった（丁度武后が唐室の李氏を抹殺しようとしていた時期）。この人の王府からは、他にペルシャやローマからの金、銀貨、金銀器が多く出土（陳列）したが、悪徳の限りを尽くしてため込んだ財宝だったのであろう。その父親（章懐太子は「後漢書」の注釈を作るなど、学者として高く評価されていた）とは全く違って、残した財宝によってただ吝嗇家としてしか名を残せなかった人のことを考えると哀れでならない。則天武後の異常なまでの権力へのこだわりがこんな所にまで及んだのだろうか。歴史は非情であり、千年の後にだってしっぺ返しができるのだ。とにかく一

枚の銀貨に対する感じ方もとても複雑なものになってしまった。

## (7) 編鐘

第一室で特に素晴らしかったのは鐘の一式だった。以前にいくつかは見ていたがこのように八個揃って、それで一オクターブを表現するものとは知らなかった。この展示の少し手前に皇帝の使用した数々の青銅の食器が陳列されていた。「あんな食器を並べて食事しながら、この鐘の作るメロディーを聴けたらいいね。」とチームのメンバーの一人が言った。全く「豪華」と言う言葉はこうした場合にしか使えないのだろうと思った。

## (8) 景雲観鐘

中庭に置かれている大きな銅鐘は、唐の中宗が建てた景雲観（道教の寺院）の鐘楼に吊るされていたものと言う。銘文は睿宗（玄宗の父）の自筆。まだまだ沢山の心惹かれるものがあったが、とにかく時間が足りなかった。せめてもう二、三日滞在出来たらと何度思ったことか。「必ず二、三年後にはまた来るぞ」と心に決めて速足で通り過ぎた。

★-☆-★-☆-★

今年（1985 年）に入ってから度々中国各地の出土物についての報道があったが、中でも甘肅省からのニュースはとても魅力的だ。（その他は陝西省の隣の省で我が家の長男も訪れている）二万三千枚の竹簡が発掘されたというものだ。このうちの三巻は前漢（中国では西漢という）の宣帝（在位 BC74~BC49）時代のもので、ある王族のもとから脱走した女奴隷の逮捕を命じた内容のもの。李静訓の石槨やこの女奴隷の記録は物語の良い題材となるだろうと思い独りでどきどきしている。中国にはまだあちこちに多くのものが眠っているはずだ。わずか二十数年前ならば、その方面の専門家でもなかなか本物に近づけなかったはずの数々の歴史的文物を西安の博物館で見られたことの喜びと感謝の気持ちはとてもうまく言い表すことはできない。けれどももっと色々なものを見たい気持ちもいっぱいだ。大規模な遺跡の発掘には、多くの人材と時間そして高い技術が必要だ。遺跡が発見されても、その発掘や公開までには相当時間がかかるだろう。できるだけ長く元気でいて次々と遺跡の中から素晴らしいものが出て来る日を待つつもりだ。 (おわり)

## 孟姜女廟

訳：一瀬靖子／大槻一枝

「孟姜女」の伝説や関連する遺跡は中国各地にあります。以下は、大連周辺に残る伝説を翻訳したものです。(口述：王大爺、整理：周春霆)

× × × × × × × × ×

「長城」から十三里ほど離れたあたりに、平原に土を盛り上げたような丘が目につく。鳳凰山である。頂は険しい岩に覆われ、望夫石と呼ばれている。山の上には孟姜女廟が建ち、廟には孟姜女の憂いを含んだ塑像が南海を見下ろしている。

孟姜女が夫万喜良まんきりょうの骨を抱いて南海に身を投じると、波打つ海に石の墓が現れた。その後、村人たちは毎年花が咲く春になると、孟姜女が身を投じたところに立ち、彼女を悼み、偲ぶのが常になっている。村人たちは孟姜女の境遇に痛く同情し、生前の固い節操に感じ入り、にこやかで愛すべき彼女の姿を懐かしむのである。

村に年配の塑像の師匠がいた。彼はこの一帯では有名な塑像の製作者で、伝えるところによれば、かつて彼が子宝の女神に、ふくよかなお尻の子供の塑像を贈ると、不思議なことに塑像は動き出して近所の子らと一緒に遊ぶようになったという。こうして彼は「神の手の張師匠」と呼ばれるようになった。

ある日、大勢の人が集まって孟姜女の話をしていると、張師匠が「我々で孟姜女の廟を建て、塑像を作り、彼女のことを石碑に刻んで、子々孫々に至るまで彼女を記念させようじゃないか」と呼びかけた。人々はみな賛成し、人格の高い年長者を選んで仕事の段取りを決めた。張師匠はもちろん推薦された一人であった。様々な方法で資材が集められ、建築が始まった。

孟姜女の廟はどこに建てたらよいか。意見が定まらず張師匠に意見を求めた。張師匠は考えた末、「孟姜女は夫を尋ねてこの鳳凰山にやって来た。石の山に立って夫の方に目をやり、その後、南海に身を投じた。人々は鳳凰山の石を望夫石と呼んでいる。孟姜女の廟はこの望夫石に建てたらどうだろう」と言った。人々は声をそろえて賛同した。

望夫石も不思議な石だった。平地に隆起した石山

の南側は断崖絶壁、人の通る道はない。土地の状況から見ると廟は南向きにし、門を北側に向けて開くしかない。着工したその日から、あたりはお祭りのように賑やかになった。

廟の建立を聞きつけた人々は、三十里、五十里もの先から駆けつけて手伝おうとする。木材のある者は木材を、力のある者は労力を提供した。

人々は張師匠に、孟姜女の塑像作成を依頼した。張師匠の下には「神業を伝える李」と呼ばれる弟子がいた。彼は張師匠の秘伝を深く会得し、彼の作成する像は真に迫るものであった。人々は彼を秘伝継承の李弟子と呼んでいた。李弟子は張師匠の指示に従って、孟姜女像を北向きに配置し、精密に造り上げた。

人々は一目見ると、この塑像は化粧をして眉を引き、姿もおやかな孟姜女の生前の姿にそっくりだと称賛し、「この師匠にしてこの弟子あり」と李弟子の腕前を褒めたたえた。人々は美酒や上等の酒肴を用意し師弟をもてなした。張師匠は弟子の制作した孟姜女像に心から満足し、共に痛快に飲み、吉日を選んで孟姜女の開眼供養を行うことを相談した。

酔いも冷めやらぬ翌日の早朝、弟子の李が何か叫びながら慌てて駆け込んできた。「生き返った！ 生き返った！ みんな早く見に来てくれ！」彼の大声に張師匠が目目を覚ました。「何が生き返ったって？」

「実に不思議だ。昨日、孟姜女の像は北に向いて座っていたのに、一夜の間に向きを変え、南向きになった。彼女は生き返ったのではないか？」という弟子の言葉を張師匠は信じられずに言った、「どうしてそんなことが……？ 私は一生塑像を造って来たが、そんなことは聞いたこともない」

「お師匠様、信じられなければ自分の目でご覧ください。本当です」と言われ、張師匠は弟子に従って事の真偽を確かめに寺へ出向いた。

張師匠は驚いた。孟姜女像が確かに顔を南に向け、北を背にぐるりと向きを変えているのだ。多くの村人もこの不思議な出来事を見に集まって来る。

張師匠は「これはおかしい。お前は昨夜酒を飲みす

ぎて眠りこけている間に、誰かがいたずらして塑像の向きを変えたのではないか？」

弟子は答えた、「昨夜、私はここで寝ました。誰かが来たら分からないことはないはずですが」

張師匠は詳しく尋ねようとせず、村人たちを呼び、皆で孟姜女の像をぐるりと元の位置に戻した。張師匠は注意深く塑像を調べたが、破損したところも見当たらないし、人に動かされた痕跡もない。

「どうしたのだろうか？」彼は不審に思い、弟子にしばらくの間、夜は塑像に張り付いて見守るようにと申し付けた。

夜になると弟子は師匠の言いつけ通り、両眼を皿のようにして、微動だにせず、孟姜女の像を見守った。三更（真夜中）が過ぎ、四更（真夜中の2時ごろ）の夜警の拍子木が過ぎて行った。彼は、「今夜は孟姜女の像が方向を変えるなどということはあるまい」と思っていた。

しかしそのうちに弟子は眠気に襲われた。彼は「あと半時もすれば夜が明ける。眠ってはいけない。眠ってはいけない……」と言いながらも臉が下がり、頭を垂れると眠ってしまい、いびきをかきはじめた。鶏の一声に眠りから覚めて目をこすり、孟姜女の像を見て驚いた。あの孟姜女の像が、また昨日と同じように、南に大きく向きを変え鎮座している。弟子は疲れも忘れて山を駆け下り師匠に報告した。

まだ目覚めていない師匠に、「お師匠様、早く見にきてください。孟姜女の像がまた方向を変えて南海を見えています」。張師匠はこれを聞き、しばし声を失った。彼はいろいろと策を立ててみた。共に村の人たちと交代で徹夜もしたが、如何せん孟姜女の像は同じように位置を変えて南海を見つめる。

師匠は銀色の鬚を撫でながら思いに沈んだ。「孟姜女の心は南海に向いているのだ。どうして私が彼女の意に背くことができよう？」

弟子が、また師匠を呼びに来た。「お師匠様、皆さんが孟姜女の塑像はどうするのかと言っています」

張師匠は「弟子よ、私は考えた。孟姜女は生前はるばる夫を尋ねて来て、この岩山に登り、北を向いてはるかに長城を望んだ。長城に辿り着き、泣き崩れた。涙で崩れ落ちた長城から、血痕をたどって屍を探し出し、最後に、彼女は遺骨を抱いて南海に身を投じた



望夫石のある鳳凰山（中国サイト 六歩成文-百家号より）

のだ。孟姜女の願いはそのまま受け入れ、塑像は南に向けて夫に向かわせるべきだ。塑像を南海に向け、廟の門も南に向けて開こう」

人々は同感し、孟姜女廟の建て直しが始まった。寺を望夫石の南側の断崖絶壁上に建てると、正面に道はない。当時、孟姜女が山を登り、百八歩踏んだ足跡に従って、改めて百八段の階段を築造し、側面から登るようにした。

廟が建立され、孟姜女像も弟子の李によって造り上げられた。孟姜女を南に向かせると塑像は更に生き生きとした表情になった。弟子は塑像を完成させ疲労困憊して、早く床に着き、翌朝早く廟へ塑像の様子を見に行ったが、本堂に入ってまた驚いた。

頭を上げて南海を眺めていた孟姜女の塑像は、一夜明けると頭を垂れ、顔に涙の跡を残してうつむいている。李は「不思議だ！ 不思議だ！」とつぶやきながら飛ぶように師匠の下へ駆けつけた。

張師匠が弟子について寺へ行ってみた。師匠は白銀の鬚をひねりながら、おもむろに弟子に言った。「今夜、廟の本堂に十斤の蠟燭を一对灯そう。盗み見をされぬよう門は閉ざして人目を遠ざける」と。弟子は師匠の言いつけ通り一切の準備を整えた。

翌朝、人々が案じて廟へ見に行った。孟姜女は前の二回とは異なり、悲し気な表情で南の海を見つめていた。そこからはちょうど南海の石碑が展望できた。

以後、孟姜女廟を訪れる観光客は、孟姜女像の後ろに立って南海と石碑を見るのが常となった。張師匠と弟子の李による孟姜女廟の建立、塑像作成の物語は後々まで人々に言い伝えられた。

## ■顔回と顔淵のこと 後藤 芳昭

孔子の高弟である顔回の回は名(なまえ)、顔淵の淵は、字(あざな)で同一人物です。

孫文と孫逸仙、文は名(なまえ)、逸仙は字(あざな)。

名(なまえ)と字(あざな)は、中国の古典や漢詩、近代史の登場人物を特定するのに非常に難儀をします。

今再読中の「論語の活学」(安岡正篤著)に、その解説文がありましたので、ご紹介しましょう。

## ◆その1：字(あざな)のつけ方

1. 字(あざな)というものは、まず名(なまえ)がつけられて、そのあとにつけられる。
2. その名(なまえ)に関連してつけられるのが原則

回はめぐるで、淵はふち、即ちサンズイ偏に旁(つくり)の左右は土手、真ん中の一は、水のめぐるさまをかたどった文字で、大いに関係があるとのこと。関連も意味深遠です。

文と逸仙の関連はどうなのか？悩ましいところですね。中国人ならすぐ分かるのでしょうか？

## ◆その2：名(なまえ)と字(あざな)の用い方

両親とか、先輩・師匠との間で呼ぶときは名(なまえ)、他人や友達の間では字(あざな)を使うとのこと。孔子との間では、顔回、門弟の友達とは顔淵ということになります。

ついでに号(ごう)に触れます。

孫中山は、孫文の号(ごう)です。

号(ごう)とは、

- ①学者・文人・画家などが本名(なまえ)、字(あざな)のほかに用いる雅号。ペンネームなどです。
- ②名称・呼び名また列車・航空機などの下に添えて用いる。称号・屋号、ひかり号など。屋号は、商家(三越、伊勢丹など)または俳優などの家の

称号(成田屋など)とのこと。(広辞苑より)

漢詩の作者名は、名(なまえ)または字(あざな)のどちらで標記するのか？手元のテキストを見たら名(なまえ)でした。作者の紹介欄に字(あざな)も紹介してあるのでどんな関連があるのか着目点が増えました。

現代中国の字(あざな)はどうなっているのでしょうか？どなたかご教示ください。

## ■わりりい 11月の活動

わりりいは、11月3日(祝)の「夢広場(於：ポッポ町田)」、11月26日(土)の「まちカフェ(於：町田市役所)」に参加します。

今年の夢広場は、物品販売のみでの参加です。お知らせが間に合えば、覗いてみてください。

11月26日(土)のまちカフェでは、満柏画伯の墨絵ワークショップを開催します。子供に好評ですが、大人も年賀状用の墨絵を習えるかもしれません。物品販売では、会員さん手作り・布製のmy箸入れ、コースターなどや、不要となった中国産物品などが並びます。

お時間が取れましたら、是非のぞいてみてください。

## ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

行けど萩

行けど薄の原ひろし

夏目漱石

qiū cǎo màn màn xún wú lù  
萩草漫漫寻无路

pú wěi máng máng bú jiàn tiān  
蒲苇茫茫不见天



## 第 177 話 酒を嗜む

酒好きな親子がいました。ある日、二人は市場で大きな酒瓶を買って家に帰る途中、息子がうっかり瓶を石畳の地面に落として、割ってしまいました。それを見た父親は大声で、息子の不注意をなじり始めました。

息子は、酒が地面に零れるとすぐはいつくばって、顔を地面に近づけて、ちゅうちゅうと吸い始めました。暫くして、父親が未だ立ったままなのを見て言いました

「おやじ！早く飲まないで、土に沁みてしまうよ。肴など探している場合じゃないよ！」

## 第 178 話 酒の味、

ある人が、酒屋で立ち飲みをしたが、その酒は少し酸味があったのでそう言うと、酒屋の主人はひどく怒ってその男を店の柱に縛りつけてしまった。客が縛られているのを見て、別の客が、どうして客が縛られているのかと訊ねると、店の主人が言った；

「店の酒は一番いい酒なのに、この男は酒が酸っぱいと云うんだ。縛り付けるのは当然だろ！」

別の客が言った：「じゃ、私にも一杯飲ませてください。味を見てみよう」

店の主人が酒杯を捧げ持ってきたので、客は一口飲んで、「顔をしかめて言った：「この男は放してやってくれ。代わりに私を縛り上げてくれ！」

## 第 179 話 気候は正常だ

一人の役人が暖かい部屋で客と食事をしていた。彼の傍らには、炭火が真っ赤に熾った火鉢がおいてある。暫く酒を飲み、料理を食べる間に、彼は暑くてたまらなくなり、客に言った：「今年の冬は暖かいね。異常気象じゃないだろうか？」

ドアの外で、足を踏みしめて立っていた使用人が言った：「外の気候は異常ではありません。正常です」

## 第 180 話 板打ち 3 斤の刑

以前、一日中杯を手に、仕事もせず酒を飲んでいる県の役人がいた。

ある日、役人が酒ですっかり酔っている時に、百姓がやって来て、身の潔白を訴える書状を提出した。この県の役人は、自分が酒を飲んでいい気持ちでいたのに、酔いを醒ますような仕事を持って来た百姓に腹を立てて、気持ちが高ぶったまま執務室に入り、机を叩きながら言った：「誰が提訴などと喚いているのだ。連れて来い。先ず私に板打ちの刑を与えろ！」

下っ端の役人は急いで跪きながら訊ねた：「幾つ叩きましようか？」

役人は、酔いが回った目で、指を 3 本立て、ろれつの回らない口で、もごもごと言うのだった：「ま、3 斤だな……」

## 第 181 話 風流な対句

酒の好きな師匠がいた。彼の欠点は、飲むと酒乱になる事だった。ある日、師匠の句に、対句で応えるよう弟子を促した。

師匠が言う：「雨」

弟子が応える：「風」

師匠：「催花雨（春雨）」

弟子：「撒酒瘋（酒乱）」

師匠：「庭に春雨が降り続く（園中陣陣催花雨）」

弟子：「宴では酒乱が始まる（席上常常撒酒瘋）」

師匠：「お前さんの対句はなかなか良い。しかし、先輩の欠点をあげつらうのはどんなものかな？」

弟子：「師匠が欠点を直さなければ、私が師匠の師匠になります」



【わんりいの催し】  
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

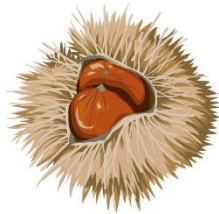
- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：11月15日（火）10：00～11：30  
12月20日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

\*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：11月27日（日）10：00～11：30  
12月：未定
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）  
Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)



■ 11月・12月定例会 代表宅

- ▼ 11月10日（木）13：45～
- ▼ 12月8日（木）13：45～

■ 'わんりい' 発送 三輪センター

- ▼ 11月号 10月31日（月）
- ▼ 12月号 11月30日（水）

☆☆ 編集後記 ☆☆

もう11月です。月毎のカレンダーは残すところ僅かに2枚。そろそろ新しいカレンダーを用意しなければいけない時期です。

最近私は、今頃になると「日本国際連合協会」が発行する「世界の児童画カレンダー」の購入を申し込みます。40年以上も前、当時の同僚の姪ごさんの絵が採用されたからと1部頂いたのが、このカレンダーに出会った初めでした。その後は目にする機会がありませんでしたが、'わんりい'に参加させて頂いてから、毎年購入できるようになり、その申し込みをするのが、新年を迎える準備の先駆けになりました。

世界中の国々から、子供たちの絵を集めてこんな素晴らしいカレンダーを作れる国連が、最近はその調停能力の機能不全が取沙汰されています。加盟国の責任とはいえ、残念なことです。

~~~~~

'わんりい'は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい

10月以降の入会は、当年度会費1000円

■ 問合せ：044-986-4195（寺西）

'わんりい' 278号の主な目次

|                        |    |
|------------------------|----|
| 寺子屋・四字成語（57）『食言而肥』     | 2  |
| 「日译诗词」（27）楚辞の中の神話      | 3  |
| 「漢詩の会報告」（62）李白『憶秦娥』    | 4  |
| 「中原」雑感（26）「食」の思い出      | 6  |
| 中国の面白い神話伝奇物語（19）「古鏡記2」 | 8  |
| 「東西の峻厳な二人の革命家」（5）      | 10 |
| 陝西省博物館見聞記（下）           | 12 |
| 孟姜女廟                   | 14 |
| みんなの広場                 | 16 |
| 中国の笑い話（51）             | 17 |
| 'わんりい'の催し・お知らせ         | 18 |